

# 私の戦争体験

第16集

子どもたちの明るい未来のために語り継ぎます。

—被爆50周年を前に—

いづみ  
特集号  
1994年8月



## 集団疎開の思い出

泉佐野市 甚野 千代子

昭和十九年、大本営発表の軍艦マーチ入りの戦果発表では裏はらに、あちこちの島の玉碎ニュースも聞かれるようになった。「欲しがりません勝つまでは」をモットーに、子ども達はモンペ姿に防空頭巾。私たち教師も国民服にゲートル姿で教壇に立った。戦争一色に塗りつぶされた大阪市の学校に、突如として学童疎開の命令が出ると、縁故をたどって疎開する子が一人、また一人とふえ、歯の抜けたような寂しい学級になってしまった五月頃だった。

和歌山県の東山東村・西山東村に集団疎開をするようとの指示が出た。三年生以上、三百人の大部隊の移動である。十一の寺に分散することになった。いつ終るとも知れぬ戦争、物資不足・食糧不足も甚だしい時代に、可愛い子どもを親の手もとから離してしまって、不安さは、まさに悲痛そのものであった。平和な時代なら、とても出来ることではない。本土が戦争になるかも知れぬという、命がけの毎日だったからこそ、半ば諦めの気持ちも手伝って遂行出来たのであった。しかし子ども達は、先生や友達と集団生活が出来るとはしゃぎ、修学旅行にでも行くような明るい笑顔で出発することが出来たのは、引率する教師としてせめてもの救いであった。



沢山の村人が駅まで迎えに来てくれたのを見た時、救われた気がして、ホットしたのは偽らざる気持ちであった。「まあ不憧じゃのうべ、この小さい年で、親元を離れてのう…」と涙を流して出迎えてくれたにもかかわらず、それを不思議そうに見ていた子ども達は、一体何を考えていたのであろうか。

大きな寺へは、三十人、小さな寺には十五人と分散し、それが広範囲にわたり連絡も大変であった。寺での生活は言い知れぬ苦労の連続であった。そして子ども達の一番の願いは、「何でもよいから腹一杯、食べてもらいたい」とのことである。

「たい」ということであった。しかし昼ごはんといえれば聞こえはよいが、アルミ皿に中位のじゃがいも五つ、塩気のないえがらっぽいものを、皮ごと食べるのである。皮といえば、ミカンも外の黄色い皮を食べた。皮にはビタミンCが多いからと、食糧室の奨励もあったからだった。和歌山はミカンどころだといつても疎開の子の口に入るのは僅かであった。ミカンを洗ってガブリとかぶり、顔をみあわせて苦笑いしたものだった。弁当はサツマイモのつるが半分、砂糖も醤油もないうすい塩味のみ、残り半分はサツマイモ。でも弁当は薬しかった。贅沢も文句もいわずに食べる。食べ終った時から腹が減っているのであった。「先生、ゆうべ夢みたよ。ものすごく、ええ夢や。砂糖がな、雪みたいに降ってくるねん。それを大きな口あけて受けたら、おいしかったでえ」現実で満たされぬことを、夢で満足しようとする子どもの心情を、どんなに不憧に思つたことか。「先生、戦争終つたら、思いきりおにぎり食べられるかなあー」「そうねえー、それまで頑張らないとねえー」

食べものの話が、いつも話題の中心だったことは、たしかだった。あれからもう五十年、その頃の子供は、もう六十歳を越しています。「戦争の時には、アメリカが勝つたでえー。それ思つたら、今はありがたいっちゃ」。時代は大きく変わった。子や孫に、このことを話しても、わかつてもらえない。だが、どうしても風化させたくない気持ちである。

昭和二十年三月十日、六年生の中学受験のため、大阪に帰ってきた。その頃は六年生まで義務教育、中学校や女学校へは入学試験があった。帰つて間もなく、学校へは入学試験があった。帰つて間もなく、

三月十四日の大空襲にあった。真赤に焼けた大空、火をふきながら次から次へと続けて落ちる焼夷弾、全く生きた心地がしなかった。消防車、防空壕など、何の役にも立たず、焼夷弾の落ちたところは燃えるがまま。大阪の街は、焼野原になってしまった。子どもたちの願書を出した学校も大半は焼けてしまった。そのため入学試験は中止。全員合格にはなったが、学習は二の次、勝つための学徒動員に駆り出されたのであった。三月十七日は卒業式であったが、それも名ばかり。在校生は一人もいないし、保護者も、パラパラ。こんな寂しい卒業式があるだろうか。一枚の薄っぺらな卒業証書が、それを物語るのみ。記念写真どころか、焼けあとの後始末で大変だった。

教師も子ども達も、本土が決戦場になつて、全員玉砕しても勝つんだという矛盾した信念を植え付けられ、学校教育もそのことに徹していた。今から考へると、何とつまらないことと思われるかもしれないが、その時は、みんな真剣そのものであった。私は、それでよかったです。それでよかったです。何故なら少くとも私にとって、その時を力いっぱい生き抜いてきた力が、それからの私の人生において、辛かったときの支えになってくれたと信じているからである。二度と味わえない経験をしてきたことは、決して無駄ではなかつたと思っている。これから後、何年生きるかわからないが、私の人生の一頁を彩つてくれた、懐かしい思い出である。

大阪市の小学校で児童と共に集団疎開を経験し、戦後、泉佐野市に転じ、第二小学校を最後に昭和五十三年、三十七年間の教員生活を終える。

# 昭和二十年夏の思い出

八尾市 矢野 由子

毎年夏が来ると何故か戦争の頃の思い出が頭をかすめ、忘れかけている様々の事が思い浮かんで来るのです。すでに五十年近い月日が流れているというのに。昭和二十年六月十五日私は上本町六丁目の近くに住み、東区北久太郎町（現中央区）の女学校に通っていました。その日多分お昼前だったと記憶しているのですが、空襲警報のサイレンが鳴るや否や、シュール、シュールと焼夷弾が大粒の雨の様に落ちて来たのです。当時我が家は母と妹二人の四人でしたので、あわてゝ防空壕の中に入りました。防空壕といつても、今の人達にはどんなものかほとんど理解出来ないでしょう。それは家の床下を一メートル位掘り下げ、畳一枚位の広さの所にむしろ敷いただけの、床下の部屋といったものでした。それでも家にある大切なものを運び込み、木製の「フタ」をして空襲の終るのをじっと待っていたのです。しばらくたつと前栽の方に落ちた焼夷弾から火の手が上っているのです。お腹の底まで響く炸烈音と火の手、目と耳をおさえ、ぬれた防空頭巾をかぶって動けなくなっている時、家の前の道路の方から声がしました。多分警防団の人だと思います。「大急ぎで防空壕から出て学校の方に避難して下さい」という声が聞こえました、妹は前栽の方の火の手

を消そと水をかけに行きました。私と母は防空壕の中のものを大急ぎで、リヤカーに積み込みました。「早く逃げて！」という声にせかされ、リヤカーを押して学校（現高津高校）の方に向いました。あの辺りは坂が多く、リヤカーはいくら押しても我々の力では坂を上らないのです。坂の途中まで来た時警防団の人達が「そんなもの押してたらあかん。早く早く」という声にせかされ、リヤカーを放り出して学校の堀の中に逃げ込みました。そして目の前の家が焼け落ちていく様を見ている時の恐しさ、悲しさ。女学生になつたばかりの私には体の中から力が抜けて行くのが感じられました。数時間がたち、辺りが静かになった頃、学校の外に出て見ると、坂の途中に放置したリヤカーも黒こげになっていました。その時四人顔を見合せ、やつと助かったのだという実感がわいて來たのです。小さい妹はまだ三歳でした。お腹がすいたと泣き出しますと、非常袋から乾パンを取り出し口に入れてやつたのですが、多分味はわからなかつたでしょう。

それから数日後、先に疎開していた祖母と弟妹のいる広島県の三次という所に、私達も行く事になりました。大阪には住む家も失くなり、更に空襲ははげしくなつて来るからという事で、転校の手続をしに学校に

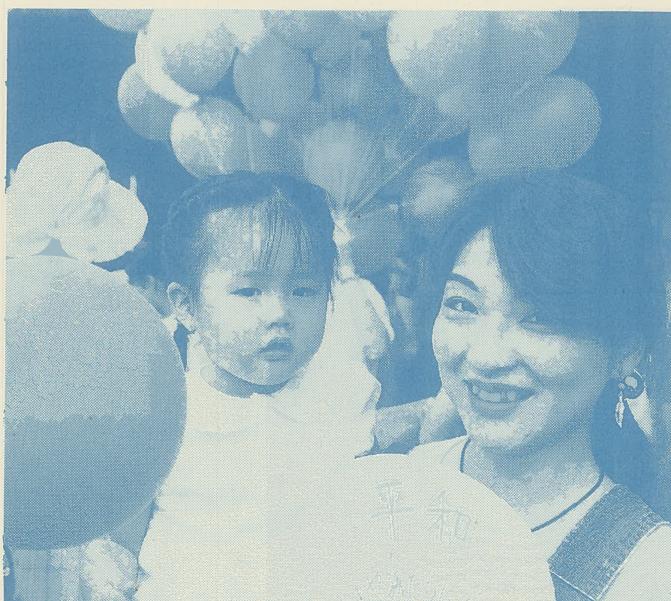
で、学徒動員には出されていなかつたので、すぐに  
転校の手続きをしてもらいました。

の爆弾が、すべてを終らせた様です。八月十五日敗戦の詔書を読む天皇陛下の御声が聞こえた時、大人達は雑音のはげしいラジオの声を理解したのか「戦争は終つたらしいよ」と一言つぶやきました。私はそばに立っていた祖母と母に「もう大阪に帰れるね」といつた事だけは今もはっきりとおぼえています。

した。列車から線路に抱きかゝえてもらって降り、福塩線に乗りしかえました。機銃掃射があるという情報で福山駅の手前で降されたという事がわかりました。福山から又何時間もかけて十日市（現三次）に着いたのは、夜中に近かった頃でした。まっ暗な闇の中を手さぐりする様に、祖母と弟妹の疎開していく家にたどり着いた時、祖母は泣きながら私達を迎えてくれました。その頃は顔を見る迄は、生死すらわからない時代だったのです。

三次高女に転校し、新しい友人が出来ましたが、私は  
達は疎開者ばかりのクラスで、各地から親に預けられ  
た人や、大阪や神戸そして東京・横浜・名古屋といっ  
た都会から来た人ばかりのクラスで、言葉も色々あり  
早くなじまなければという気持で一ぱいでした。

学校での授業はほとんど無く、山に木材を運びに  
行ったり、農家の田の草取りの手伝いをしたり、今迄  
に全く経験した事のない仕事を次々と与えられました。  
そんな生活を送っていた八月六日、広島に原爆が投下  
されたのです。広島からの避難者や怪我人が、三次の  
町にどんどんと送り込まれてきました。怪我人の中に  
は見るのも恐しい様な風貌の人も多く、広島から列車



# 私の東京大空襲

東大阪市 川東 みさを

今でも静かに目をとじれば回り灯籠のようにあの日のことが、頭の中に次々に浮かびます。昭和二十年三月九日の夜、B29の大編隊の空襲に巻き込まれて、一命を神のお恵みで助けられた私は。その日、東京の空は雲一つなく星がかかるがやき、夜風も少なく暖かでした。窓から見る砂町方面は焼夷弾で火災がおきて、空は真赤、我が家の方まで真昼のようでした。その時町会長さんが、メガホンで「皆さん逃げて下さい」と大声で町内を走り廻っておられました。ノンキ者の私はそのままの声に驚き、にげる準備にリュックの中を改め、貯金通帳と印鑑と大きいお金はいつも入れて置いたので、タオルやら常備薬の補充等配給食糧の残りなどを詰めて背負い、大きな掛フトンを頭巾の上からかぶり表へ出ました。その時、大切なバックを忘れたことに気づきました。その中には母からの手紙・一寸重要な住所録・手帳・宝石箱（亡姉の形見のヒスイの帶止めや指輪など）等が入っていて、かべに掛けていたのです。もう一度中へ入りかけたのですが、私の部屋は会社の寮の三階で、もうとても無理な状態でした。外は多勢の人々がにぎまどっていたのです。私は会社の都合で四ヶ月位前に龜戸へ来たところなので、東京の地理等分らず、外へ出たものの、どちらへ行けばよいのか



か、途方にくれました。フトンも風で飛ばされ、火の粉と風の中をうろついて、あゝもう駄目だなどその時自分の死を覚悟しました。

道路は右へ左へと逃げまどう人でいっぱい。隣組の人達もバラバラになりました。そんな時、同じ町会の男の方が、私の名前を呼んで下さり、「僕と逃げよう。精工舎の裏がいい」とおっしゃつれて逃げて下さいました。近くに精工舎の時計工場があり、その裏を

強制立退きで避難場所とした空地があつたのです。そこへ二人逃げ込みました。もういっぽいの人です。そこに隣組の方が三人程おられたので、私も仲間に⼊れて頂き避難したのです。

他の人もいっしょに、精工舎の防空壕の中へ逃げこみました。何故かと云えば私達が居た場所も一〇〇%安全な場所ではなかったのです。回りは火の海で、火の粉は雪のふる如く頭巾や衣服の背中にどんぐり来て、頭巾がもえ出したりしてとても危ないのです。消防団の方が「この中に火が入れば全滅だよ。お互いに火を消しあいましょう」とメガホンで呼びかけて走り回っています。その時、「精工舎の中に火が入ったぞ」と叫び声があり、空地へ又にげていったのです。あとで聞けば、防空壕に残った人達は全滅だったそうです。安全な場所とてありません。空地の中でも石が燃えて來たら左へ、前が燃え出したら後へ、せまい空地の中を多ぜいの人が移動するのです。空も真赤。地上は火と風で、砂塵が舞い上りまどもに目もあけておれません。そのうちB29も去り、明方になつて空も白み始め、助かったと隣組の方と喜び合つたものです。「自分達の家の焼け跡に行って見ましょう」と大通りへ出た時、驚きとおそろしさに身がすくみました。

一番先に見たのは、馬とその横で男性らしき人の、空をつかむような焼死体。それから累々たる死体。あまりに多くの焼死体が横たわる情景の中に置かれた時、人間はおそろしさも忘れ、死体をまたいだり出来るものなのです。もっともまともに歩ける状態ではなかつたのですけれど。やっと自分の家の前まで来た時、軍のトラックが三台位止つていて、死体をカギ棒でひつ

かけて荷物が何かのようにならんでるのを見ました。何ともいえず胸がしめつけられて、全く頭の中が真白になつた氣持で、へたりこみ思わず天を仰きました。そのどかな青い空と地上の悲惨な光景とは、まさに天国と地獄でした。

もう焼け跡を探す気もなくなっていたのですが、私の部屋は三階だったので、灰も一番上にあるのではなく遊病者の様な氣持で、今夜すぐ自分の場所等考えもせず、焼け残った棒ざれの様なもので掘りおこしていました。目に付いた本の背表紙。「あ、これはきっとトルストイの文学集だ」と力をこめて引きぬきました。半分程焼けてましたが、表紙の金文字を見た時は恋人にでもめぐり会つたような気持でした。ページをめくると、バラバラと母の写真が半焼けで出て來たのです。もう涙がこぼれてこぼれて、自分の命あるを喜び、母が守つていて下さったとその不思議さに両手で写真の顔をさすりました。私は小さい頃より寝る前必ず本を二、三頁読む習慣があり、いつも身辺に置いていましたので、大切な母の写真もはさみ込んでいたのでしょうか。

隣組の方々も各々知人や親類を頼つて「お達者でね」と別れていかれました。私は幸いな事に、京都から新宿へ応援に来ていた義兄が、私の無事を心配して龜戸まで迎えに来てくれました。

その帰る道々これ又負傷者、火傷の人々。両手両足が火ぶくれて動くことの出来ない子供は、親にはぐれたのでしょうか。道端にうづくまる人。収容される病院も焼け、医師や看護婦の方もどうなつてしているのでしょうか。唯あてのない救助の人を待つ内に、息をひ

きどる方もたくさんあったことでしょう。唯一の救いは、三月初旬なのに暖かい日差しがあった事でした。

三月九日は私の記念日です。私の人生あるかぎり、

毎年の三月九日には心から犠牲の方々の御冥福をお祈りしております。

## 私の戦争体験

東大阪市 八川 日出子

昭和二十年の年明けからは、本土空襲の回数も多くなりました。特に三月十三日夜半は大阪市街に、焼夷弾が豪雨の様に降り落ちたという状態で、私が住んでいた北摂の村からも、大阪方面の空が、真っ赤に染まり何時間も消えなかつたのを思い出します。恐ろしい気持ちで眺めたことを、今思い出して頭の芯が痛く感じます。翌日隣家の娘さんの大阪の嫁ぎ先の一家が、着のみ着のまま防空頭巾は焼け焦げだらけ、顔は黒く焼けて、やっとたどり着かれたことを聞き、身近かに「戦争はにくい」と思ったものです。けれど当時は口に出して言えないまま心中で叫びました。それからは戦況も悪くなる一方で、当時私は女学校一年生で、二年生の二学期からは、学徒動員で軍需工場へ行かなくてはならないときかされていたのです。毎日学校へ行つても勉強など出来ず、防空壕掘り、家屋疊開（家屋密集地帯は適当に空き地を作り焼夷弾攻撃から類焼を避け、逃げ道作りの為）の家屋取り壊し作業にかり出され、学校では、軍人が来て教練をさせられ、苦痛

で仕方がなかつた記憶が残っています。

日々を追つて戦況も芳ばしくなく、敵機の本土空襲も毎日となりました。登校しても警戒警報が出る度に、帰宅を命ぜられ、電車の最寄駅から、自宅迄四キロメートルの道を徒步で帰らなくてはなりませんでした。忘れません六月八日、この日駅から三百㍍程の所に、自宅のある友達が、「今日はこちらの方面へ敵機が来るそうだから、うちの防空壕へお入り」としきりに勧めてくれたのですが、「ありがとうございます、死んでもいいから家に帰る」といつて、断わったのです。尚、追いかけて来て、引き止めてくれたのですが、何だか虫が知らせる事でもいうのですか、帰りたくてしかたありませんでしたので、「帰る」と言つてきがなかつたのです。それが運命の別れ道となりました。帰り道を歩き乍ら、恐くて足が地に着かないとは、あの時の事だと今になつて思い至ります。やはりその日の空襲は、激しく、自家の防空壕に入つていても、爆弾が、すぐ近くに落ちたかと思われる様な、震動が度々有りました。



## 学童疊開の思い出

八尾市 中井 信義

翌日通学の為、友達の家の近く迄来て、びっくり。心臓が止まるかと、目をみはりました。友達の家の有つた一帯は跡形も無くなり、大きな穴が二ヶ所位出来ていました。

足はふるえ、どうして学校に着いたか思い出せません。やはり一・爆弾が落ち、友達と家族の方が亡くなられた由、聞きました。

現在も六月八日が来ると、追つかけて引き留めてくれた友の笑顔が、眼底から離れません。私の生命のあらざたした由、聞きました。

多數の罪もない人達が命を落し、塗炭<sup>とくたん</sup>の苦しみに泣いたり、肉親の別れで人生が大きく変り、それに耐え忍び生きた人々に支えられて、今日の日本があることを、我々は決して忘れてはなりません。

一度と、戦争はごめんです。その為に、しなくてはならないことを、よく考えましょう。

昭和十九年大阪市北区野崎町の北野国民学校五年生の夏であった。戦局の激化は内地にも厳しく伝わってきていた。空襲警報が鳴るたびに、防空頭巾をかぶり教科書の入ったランドセルを肩に背負い、防空壕に避難した。警戒警報の時は部屋の電燈の黒い覆いの布が

町会別に上級生が旗を先頭に並んで通学した。先生なんて、こわくて近くに寄れないくらい。ビンタや木刀で頭を殴られ、コブのたまる間がなかった経験がある。なにしろ一人の失敗が連帶責任でものごとが片付けられた。帰宅後、柳ゴオリに日用品と衣類を詰めてみ、学校が一括して貨物便で託送した。日限の余裕もなく大阪駅を大きく汽笛を響かせ虎姫駅へと向かった。男子十七名、女子十五名、先生四人、校務員一人、女校医一人、現地で寮母さんは採用されていた。それぞれ四ヶ所のお寺に、宿泊が割当てられ分散した。一週間後に第二次として後輩の四年生約三十名が疎開してきたので、私達と共に生活に入った。

授業は四年生・五年生、それぞれ各一学級に編成され、村立田根国民学校の裁縫室で行なわれた。先生共々お寺の本堂を借りて、寝泊まりし生活をすることになり、先生は勉強を教えるだけでなく、寮長として四六時中、子供達の生活の面倒を見なければならなかつた。寮母さんも居られるわけですが、それはやはり世話のやける毎日であったと感謝している次第です。

起床六時、遙拝（皇居の方角を向いておがむこと）、朝食、登校、下校、室内整頓一と規則正しい生活が続いた。食事の煮炊きは、四ヶ所の寮の中心に近い約一・五㍍の先の笛梅割烹料理店が世話をしてくれるようになつていたので、昭和二十年十月頃迄、食事の賄



雪が積もるなんて想像も出来なかつた。雪道をなんども転びながら、わら靴で身もぢぢかみながら集団生活を送ることに懸命に努力していた。夜具の片付け、境内の掃除、雪除け作業等、疎開といふと暗い面、寂しい面ばかりが、強調されるようですが、つらくなりに楽しいこともあります。雪の通学は、竹馬に乗つて通う情緒もあり、懐かしく感じられる。夏には灌漑用水池でひしの浮草を搔き分けて泳いだ記憶もよみがえつてまいります。

湖北地方は寒いところで、夜本堂で寝ていると古い建物だから障子の隙間から冷めたい風が容赦なくはいつてきただが、さいわいに本堂の真中に堀炬燵が設け

られていたので、縦横に寝床を敷いて暖をとりながら、布団にもぐつた。夜中に長い廊下伝いに歩き、庫裏に出てから下駄を履いて庭の端にある便所へ行くのがつらく、子供心に恐くて、きもだめしのようであつた。

面会は日帰りが原則であったようで、国民服のおじさんや、モンペを着たおばさんがたずねてくれた。母も忙しい日をやりくりしながらたずねてくれたが、嬉しい反面、やせ細った母が涙を止めどなく拭っていたのが印象的であった。

この地方は江州米が出来、四季折々の果物野菜も豊富に収穫される恵まれた土地であった。だから私達は幸せであったのではないか、と思われてならない。

当地に来てからの先生は、寝床を共にしているだけにいくぶん厳しさもうすれ、やわらぎを感じて親しく接することが出来るようになつた。子供心にプラスであつたように思われる。だが失敗だけは繰り返さないようになつたと緊張はかくせなかつた。

日曜日になると数人で近くの山へ出かけて薪をとつてくる役、杉の木によじ登り五位鷺の卵を巣から頂戴する役、水田でたにしや池でモロコを釣る役など、夕食の一品に執念をもやしていた。

当初は村の子も都会の子を見て、からかつたり不思議がついていたが、徐々に馴れてきて挨拶をかわすようになり、畠仕事も手伝つたりして村の人達とも仲良くなつていつた。そうしたきっかけで、それぞれ夜になると農家を訪ねて、もらひ風呂もさせていただいた。五右衛門風呂の入り方がわからず、まごまごしたのも忘れられない。

十一月二十四日の正午に警戒警報が発令され、二時

三十分に解除になつたが、この日からときおり警戒警報、十二月になると空襲警報も発令されるようになつてきた。

十九年秋といえば、B29の大編成による大空襲の恐怖が都市に近づきつたのだが、この片田舎に過ぎず私達の生活は、そんなものからはほど遠く感じられのどかであった。ただ物資は極度に不足はしていたが、食料はなんとかひもじくない程度にあつたし、なによりも敗戦への恐怖感は全くなかつた。

昭和二十年八月十五日正午に全員本堂に集まるように先生からいわれた。片隅に座机が用意されラジオが載せられていた。ラジオの前に正座させられ、天皇陛下のお言葉を聞くようにいわれた。玉音の終わる迄聞いていたが、何があったのかピンとこなかつた。先生が「日本は戦争に負けて、終戦になつた」と涙ぐみながら話されたので、全員が不安な気持で一杯であつた。大阪市内は焼野ヶ原で住む家も無いと聞かされたので、先生は代表して近日中に大阪に戻り、今後の指示を聞いてくるので、このまま現在の生活を続けるようになつた。

やつと十月中旬に引揚げることになつた。大阪駅で久しぶりに母親が迎えに姿を見せてくれた。高架になつてているプラットホームからの風景は、一面瓦礫の山であり、焼焦げた大きなビルが、あちらこちらにボツン、ボツンと残つてゐた。先生の説明が終わり解散になるまで整列していなそばを、大きな背の高いM.P.(アメリカ陸軍の憲兵)が銃を持って見回わりをしている姿を見て、恐怖感を覚えた。これからどうなるのかなあ……と不安感が頭の中をよぎつた。

## 遠い昔でも忘れられません

堺市 後藤 節子

昭和二十年は悲しい思い出がいっぱいです。大阪市糸屋町の家を焼け出され、弟と妹を亡くした年です。今年の三月、ふたりの五十年忌を嘗みました。

三月十三日の記憶は、当時小学校四年生だった私の脳裏に、はっきり刻まれています。その日は弟のお葬式だったので。弟は軍人の子弟の通う偕行社の小学二年生でした。学校で相撲を取っていて、腸捻転を起こし、医者の誤診もあって手術後急逝したのです。

会葬にきてくれた親戚の者も帰り、家には両親・私・妹三人（四歳・二歳・当歳）と当時二十歳位で堺市の西屋敷国民学校で代用教員をしていた叔母がいました。悲しみと疲れから寝込んでしまっていた深夜、警戒警報が不気味に鳴り響きました。父は在郷軍人で、内地応召で、警報が出ると軍服・帯剣で八尾飛行場へ出動しなければなりませんので、避難するのを女ばかりだったのです。その日、父はでかける直前、私に大きな革鞄を預け、「絶対になくさないよう」と言つたのです。弟の亡い今、長女の私に大切なものを託し、守らせてたのでしょうか。

家の向かいにあった東大江小学校の地下室が私たちの避難場所だったので、六人で逃げ込みました。すぐに解除されるだろうと、荷物も殆ど持たず、団団だけ

でいっぱいでした。防空壕で焼け死んだ人、蒸し焼きになつた人。まだくすぶっている建物の陰で真っ黒焦げになつてゐる人。必死に子供の名を呼びさがしてい る若い母親…。かわいそうに、と涙している余裕は時間的にも、気持ちの上でもありませんでした。

天六で叔母と別れ阪急電車に乗つて（この間の記憶は何故かありません）、桂で乗り換えたのですが、その車中、年配のご婦人が私たちに話しかけてきました。私たち五人、焼け出されたひどく惨めな恰好をしていました。「大阪からこられたの？ 大変でしたね」と言って、半紙に包んだお菓子を下さったのです。どんなお菓子だったのか、どんな味がしたのか、全く記憶にないのでですが、その半紙の白さが今も目に鮮やかに残っています。「京都の人は空襲に会わなかつたからいいなあ！」と思つたことを覚えています。

嵐山の家に父も無事に帰つてきましたので、大事に預かっていたあの鞄を返しました。そして七月十一日、末の妹が腸炎でなくなりました。母の母乳を十分に飲むこともなく、逝つてしましました。かわいそうでなりませんでした。きっと彼岸で、弟が可愛がつてくれていることでしょう。

駅や繁華街には浮浪兎があふれていました。私や妹だって、あの火の向きが違つていたら…運が良かつたんです。父がこんなことをいっていました。弟とそつくりの浮浪兎をみつけたことがあって、連れて帰りました。いと真剣に考えたけれど、三人の子どもを育てるだけ精一杯だったから、断腸の思いで諦めた、ということでした。あの子は無事に生き延びたのだろうか…と氣になつてゐるようでした。



私は昭和九年生まれです。戦争の体験を伝えていく最後の世代ではないかと思います。平和を願うひとりとして、その責任を痛いほど感じています。

その頃を思い出すとき、「口をついてでる歌があります。

『疎開のうた』

「いってきますとあの日から、僕も私も元気よく 小楠公をお手本に 僕らの疎開は勝つためだ（思い出せない歌詞二行）日本の宝だ 僕たちは」

どうしても思い出せない箇所があります。とおーい、とおーい昔の歌です。

（聞き書き）

持つていって、全員それにくるまつてじつとしていました。外からいろいろ物音が聞こえてきました。運動場へ出てみたのは、どの位時間が経つてからだったのでしょうか。

目を疑いました。そこから見えるもの全てが燃えているのです。まるで町中が燃えているようでした。「逃げなくては！」私は鞄を抱え、四歳の妹の手を引き、叔母は二歳の妹を抱き、母は赤ん坊を背負い、はぐれないように、はぐれないようになると励ましあいながら、天満橋までたどりつき橋の下で非難していました。その時、カンパンをいたたきました。やっと夜が明けてきた時分に黒い雨が降つてきました。その雨は余り長い時間ではなかったように思います。母の背の赤ん坊の頭から、ゆらゆらと湯気が上がつたのを記憶しています。我が家へもどつてみると家は焼け落つていました。

母の実家のある京都嵐山へ行こう、と天六へ天六へと急ぎました。とにかく下を見ないで、まっすぐ前だけを見て、鞄をしつかり抱え、妹の手をしつかり握りしめて歩きました。妹もまだ幼いのに、「手を離したら大変なことになる」とぐずりもせず、黙つて歩いていました。明るくなるにつれて、辺りは恐ろしいもの

## 軍国の母になどなりたくなかつた

堺市 小森 光子



仮壇のある部屋の長押<sup>ながし</sup>に、二枚の額がかかるつています。一枚は『日本國天皇は故小森龍殿を勲六等に叙し、単光旭日章を贈る。内閣總理大臣佐藤栄作』昭和四十三年十月二十六日もう一枚は『あなたは困難な世相文三 昭和三十二年三月三日』です。

天皇の名で召集され戦死した夫は、天皇から勲章を

叙されて喜んでいるのでしょうか？夫は私が未亡人として表彰されたことを喜んでいるのでしょうか？

私は夫に元氣で帰ってきてほしかったし、未亡人なんかに、軍国の母なんかになりたくないありませんでした。

私は明治四十三年生まれで、今年八十四歳になります。夫が戦死して、今年は五十回忌です。夫は昭和十九年五月召集されました。その頃私たち一家は、私の母と私たち夫婦と子ども五人の八人家族で、大阪市阿倍野区阪南町に住んでいました。

出征後、たつた一度だけ夫と面会したことがあります。八月の中頃でしたか葉書がきました。九歳の長男と五歳の長女の手をひいて、広島へいきました。駅に着いた時空襲を受け、駅舎の陰で母子三人丸くなつて震えていました。そのまま駅で野宿して、朝を迎えた。駅前の宿屋で夫と会ったのですが、許された時間は僅か一時間。何を話したのやら：ただ夫が想像していたより元気だったので嬉しかったことなど、子ども

もたちの頭を撫でながら「子どもらのこと、頼むで…」といった言葉しか記憶がありません。

それからひと月後、中支から荷物が届きました。将校行李いっぱいに、冬の衣類や毛布、何故かお茶碗まで入っていたのです。これらの品物を見て、母と私は「冬物のいらん南方にいくんやねえ」と話していました。

十月の空襲で、近くの工場が直撃され、爆風で障子や窓ガラスがばらばらに壊れました。私たちは裏の防空壕に逃げ込んでいましたので助かったのですが。

その頃、物不足は深刻でしたが、特に燃料（石炭）がなくて内風呂がたてられず、町内で十軒に一軒の割合でもらい風呂をしていました。やがてそれもできなくなって、ひと駅先のお風呂屋へいくようになったのです。入口に下駄を脱いでおいたら持つていかれるので、風呂敷に包んで風呂場まで持つて入るのです。石鹼も一秒だって手離せなかったのです。悪い人ばかりがいるのではなく、それだけ物がなかったのです。お若い方には想像もつかないでしようが…。自分は我慢できても、年老いた親や子どもには何とかしてやりたいと思うのです。あの時、日本中の親がそう考えていました。

大阪も危険だということで、夫の実家である奈良県北永井郡明治村へ疎開しました。十二月のことでした。

死亡告知書が届いたのは昭和二十三年一月でした。夫は二十年六月八日、フィリッピンのルソン島イサベラ州カワヤンという所で戦死していたのです。四十二歳、陸軍中尉でした。

終戦後、何の便りもありませんでしたから、諦めて

はいました。しかし、ご近所の誰々さんが帰られたと聞くにつけ、一縷の望みを捨てきれませんでした。夜中に靴音がすると飛び起きたりして…。

カワヤンがどういう所なのか、どういう状態で戦死したのか、今もって一切不明です。気にはなりましたが、生きることに必死だったのです。母と九歳を頭に五人の子どもを、とにかく飢えさせてはならなかつたのです。

昭和二十一年一月末に奈良から岸和田の春木町へ引越してきました。昼は市役所の出張所で事務をとり、夜は春木の浜で網引きをするのです。夕方、「船が着いたよー」という声が聞こえると、モンペに草鞋ばきで浜へ走ります。網引きは重労働です。でも私だけではなく、皆がんばっていました。

とにかく、母が幼い子どもたちを世話してくれたから、私は安心して働けたのです。その母も昭和二十八年に六十九歳でなくなりました。

五人の子どもたちも成人して、近所に住んでいます。孫が十一人、会いたいときにつつもでも会えます。それに最近、お茶とお華を習いはじめました。文字通り八十の手習いでです。身体も健康ですし、ささやかな楽しみを見つけて日々暮らしている私を、仮壇の写真の夫は微笑んで見ていてくれます。四十歳のままで。

（聞き書き）

## 二十人の親戚が長崎で犠牲に

岸和田市 平野 静香

私は昭和六年生まれですから、終戦のときは十三歳、国民小学校の六年生でした。

戦時下の様々な事柄を、子どもの目に映った様々な事柄を、思い出すままお話ししてみます。私たち家族（両親と弟）は、当時父の仕事（建具の職人）の関係で、和泉市南池田に移り住んでいました。いわゆる余所者ですから、炊事の水も貴い水という状態だったので、両親特に母の気苦労は、丈夫な体でもなかつたので大変だったでしょう。

特に食糧を得るための苦労が大変でした。幸い父の仕事の建具の注文などは、細々ながらありました。母はそのままお米に代わってしまいますから、母は松の木を切り出した山を借り、松の根を掘り起こして、そこにさつまいもや野菜を作つて主食にしていました。麦八・米二のごはんかおいま・おかずはせんまい・わらび・大根の葉・さつまいもの茎・大豆。私はさつまいもが嫌いで、ご飯を食べたいといって母をよく困らせてました。

ごく稀に魚・肉・りんごなどの配給がありました。コロッテご存知ですか？今は貴重品になってしまった鯨の白身のことです。鯨を七一八cm位に切り大きな鍋でからいりをして油を取り、てんぶら油にするのです。



長崎に原子爆弾が投下。

以来、全くの音信不通。十五日、思いがけない終戦。八月の末、鳳駅で徹夜で並んで、やっと切符を手に入れ、父母は三歳の甥と長崎へ向かいました。二十四時間の行程が一週間かかる、やっと到着。長崎は全くの焼け野原！あの日から一ヶ月近く経っているのに、あちこちに死体が残っていて、蛆がわき、群がった蠅が一步步くたびに舞い上がり、漂うたまらない腐敗臭！この世の地獄です！きれいな布団が落ちていると思ってめくつてみると死体が…

母の姉の家、つい先日訪ねたばかりの家は跡形もな

いやーな匂いがしましたね。和泉の奥の父鬼で炭を買って、大阪へ売りにいったり、育ち盛りの子どもために両親はそんなんこともしてました。まっ白いさんは、おなかいっぱい食べたかったです。私が通ったのは納花国民小学校で、一学年一クラスで五十七名でした。教科書が買うにもなかつたので、わら半紙というざら紙を綴つたしろものでした。でもその頃には授業もほとんどなく、毎日竹やりの訓練・担架の作り方・包帯の巻き方・三角巾の使い方などの練習をしていました。そのうち、学校を兵隊さんに明け渡してしまい、私たちは出征兵士の家へ一人づつ勤労奉仕に行き、田植え・田の草取り・山の草けずりなどを手伝いました。休日には早朝から母と山へ行き、まぐさ（兵隊さんの馬に食べさせる草）を刈りました。昭和二十年七月、神戸の空襲で親戚の人が多くなりました。その二十日、母は長崎の姉を訪ね、三十日夜行で帰阪しようとしていたとき、眠っていた三歳の甥が起きだし、舌もまわらないのに、「大阪へ行く」といつてきかないのです。そんなに行きたがるのなら、ど着の身着のままで連れて帰つて着ました。そして九日、

く、バラック小屋が建つていきました。その小屋に、終戦直後に海軍から復員してきた姉の三男が居て、事情を知ることが出来ました。彼の手で荼毘にふしたといふ、一家五人のお骨が箱に入れて祀られてありました。母の兄の一家七人は即死。姉の一家は即死は免れたものの、放射能のため、八月二十八日に次女・九月二日に五男・三日に長女・五日に四男・六日に姉と、次々に亡くなりました。彼がみどりことができたのが、せめてもの救いでした。焼け残った木切れを集めて枕を組み、家族の遺体を乗せて荼毘にふした彼の心情はどうなつたでしょうか…

そんな訳で、両親たちは死に目に会えなかつたのです。もう少し早く着いていれば、どんなに悔やんだことかと、母の悲しみが思いやられます。

主人も父親を原爆でなくしています。戦後の混乱で、遺骨の埋葬場所がわからなくなつてしまつたのです。ずっと後年になりますが、主人が高校一年生の娘と探しにいったのですが、結局遺骨はわからず、墓地であつたと思われる所に朽ちた十字架をみつけたので、その土だけを持って帰つてきました。その土は今、主人の眠る墓に納まっています。

母の父も十年後、原爆病でなくなりました。

両親はいとこどうしで、五島列島の出身なんです。長崎市内に移り住んでいた親戚二十人が、原爆の犠牲になったのです。後年広島・長崎の惨状を本や写真、体験談などを見たり、聞いたりするたびに、なぜこんな恐ろしい兵器を人間が作ったんだろうと、怒りがこみ上げてきます。今年はあの方たちの五十回忌。心より冥福を祈りたく思います。

（聞き書き）

## 張りつめていたものが プツンと切れた玉音放送

柏原市 小里 一夫

私が生まれたのは一九一二年十月。明治が終わり、大正がスタートした年です。大正・昭和・平成と生きてきて、今八十一歳になります。戦地にはいかなかつたものの、軍事一色であった青年期や戦後の混乱期を思い返す時、「よくぞ家族皆無事に生き抜けたものだ」と感無量な思いがあります。

私の本籍は福岡県坂井郡丸岡町で、金沢大学機械工学科を卒業しました。当時は『大学は出たけれど…』という就職難でしたが、私は福岡の古河鉱業で技師として就職することができました。しかし、兵隊検査で第一乙種となつたのにもかかわらず、制定されたばかりの幹部候補生制度に適応され、見習士官として第九師団浜松航空隊に軍籍をおくことになりました。幸い古河鉱業では、国内で産出する唯一のエネルギー資源であった石炭を掘り出す企業でしたから、軍需工場の機械技師として、『召集猶予願』が軍に提出されていました。とはいっても、いつ召集令状がくるかわからない状態で、あの時を生きる青年として心呑は覚悟していました。むしろ航空隊員として華々しく花と散る事が、当然の運命だと考えていました。

心呑されるかも知れぬ身で、昭和十二年に結婚、翌年長女誕生とまづまず平穀な生活を送っていました。

地召集を受け、戦死してしまったんです。私の身代わりになつてくれたんですよ。今でも涙を禁じません。

昭和十八年頃、大阪市内が住みにくくなつてきて、柏原市の光洋精工に転職しました。光洋精工は当時、ペアリングの五大メーカーのひとつとして飛行機の部品を製造していました。家族（妻と子ども三人）は福井の実家に疎開させ、私は国分の農家の一部屋での下宿生活をおくることになったのです。それほど戦況が緊迫したものになつてきていました。衣・食・住すべてが不足し、『我慢・我慢・我慢』の日々が強要されたのです。しかし、そんな状況でも、「この戦争には勝たねばならない。一億玉碎まで戦わねばならない」と国民のひとりひとりが思い込んでいました。

こんなことがありました。軍の監督官の交代で着任したきた陸軍中尉が、なんと中学の一年後輩だったのです。私が接待館で接待することになり、久しぶりに入ることになりました。軍の監督官の交代で着任したねばならない。一億玉碎まで戦わねばならない」と国民のひとりひとりが思い込んでいました。

こんなことがありました。軍の監督官の交代で着任したきた陸軍中尉が、なんと中学の一年後輩だったのです。私が接待館で接待することになり、久しぶりに入ることになりました。軍の監督官の交代で着任したねばならない。一億玉碎まで戦わねばならない」と、死ぬのなら家族一緒に、という思いからでした。

光洋精工にも学徒動員として、たくさんの男女学生が働いていました。彼らは学業を捨てて、御国の為に戦いに勝つ為に、額に鉢巻きを締めてがんばっていました。

昭和二十年になるころ、会社に社宅が出来、そこに入る様に云われ、福井から妻子がかえってきました。私の実家とはいえ、子連れで世話をつけること、死ぬのなら家族と一緒に、という思いからでした。

経験しています。グラマンの機銃掃射に追われる、白いシャツを脱いで山の木の繁みや防空壕に退避するのです。文字通り命がけで逃げるのです。同僚がひとり犠牲になりました。防空壕に皆を避難させて、最後になった彼の背に命中したのです。光洋精工での唯一の犠牲者でした。

そして八月十五日。突然のあのラジオから流れてきた玉音を、我が耳を疑う思いで聞きました。張りつめていたものがプツンと切れてしまつて、何をどうしてよいか、判断がつきませんでした。

軍隊がなくなり、國中が生きんがための混亂に陥りました。しかしだひつ確かなことがあります。空襲に怯えることがなくなつたということです。進駐軍が入り込んできただけれど、ともかく戦争は終わつたということです。

『戦争』これほど罪悪はありません。たくさんの犠牲の上に獲得した『憲法第九条』は絶対に守らなければなりません。

私は現在九名の孫がいます。この孫達の未来が永遠に平和であることを心から祈念しています。



（聞き書き）

## ソ連抑留の思い出

堺市 梶本 磯吉

昭和二十年九月十二日二千名を一個師団として、満州チチハルで第十三師団が編成され、私もその一員となる。團長江口中佐、私は第四中隊第三小隊第二分隊。中隊長津田中尉、小隊長小川少尉、分隊長梅津曹長。一個分隊二十五名。分隊毎に貨車に分乗して、一日三回停車するだけ。進行中に用便を催したなれば、貨車の扉につかまつて。それ以上は想像して下さい。

貨車は大変のろい。一ヶ月前まで勤務していたハーラル市を車窓より見た。ソ連の爆撃で街の面影は何も無い。一面の焼野ヶ原。国境では九月半ばなのに気温は零下十度で暖房も無い。毛布一枚と防寒外套だけが寝具。戦友と身体を寄せあい暖を保つ。三度の食事は七十グラムの黒パンと岩塩汁だけ。煙草等嗜好品は全然無い。

満州里の国境を過ぎた頃、ウラジオストックより船で祖国へ帰ると言うデマが出て、一瞬のスカ喜びをさせられた。私達の目印は夜の北斗七星のみ。車内は寒くて鼻の頭が痛い。外は一面の銀世界。チチハルを出发してから幾日たったか記憶に無いが、寒風吹きあれど並んだ。ソ連人の兵隊が何か怒鳴る、ピ、ア、チ。ピ、ア、チ、と。通訳の話しでは五列に並べと言うのらしい。

ソ連人が威嚇射撃をする。食事は毎日同じ。早速ソ連人が持つて来たのは二人引きの鋸と斧。真っ赤にさびたヤスリ。二人一組で伐採に入る。伐採した丸太で第二中隊が宿舎造り。一週間でやっと夜露を凌げ丸木の半洞窟の宿舎が出来た。隙間に木の葉を詰め、丸木の床にアンペラむしろを敷いた僕、夜は毛布と外套を冠り直接外気にふれないのがせめてもの救いです。空腹と寒さで熟睡は出来ない。屋内では二ヶ所だけ炊火の許可があるだけ。二週間目に早くも六名が凍死した。

零下三十度と言う朝、明治節だから全員整列との事。東方の宮城に向かい黙祷。今考えると何と馬鹿氣た話。私達は日曜以外は休みは無く朝は七時より伐採。長さ二メートルに小切り。高さ一メートル、奥行き四メー

トルに。五時までに積み終わるのが一日のノルマです。

一片の黒パンと塩汁位で、自分の身体を整えるのが精一杯でノルマなど到底不可能です。スターリン憲法では勵力ザル者ハ食ウベカラズと言つて徹底的に強制する。伐採でノルマを達成した者にはコブシ大のジャガ芋二個を増食してやると言う。分隊長以下は階級は無く瀕死の労働。それに反して小隊長以上は労働はなく、暖かい宿舎で白いパンを食つて、毎日マージャンに耽っていた。夢に見るのは食べ物の夢ばかり。二年一年六月十二日あさ突然ヤポン、スキ、ダモイ（日本へ帰る）と言うので皆我を忘れて喜び合つた。昨年降ろされた奴までボロボロの被服でナリフリ構わず嬉しさ一杯。死に物狂いの九ヶ月。シベリアも六月になれば日中は暖かい。貨車を待つ事六時間。皆裸になりシラミ取りをする。二百五十名の中隊員も今は百八十名余。殆ど栄養失調と凍死。何処へ葬ったかは不明。

昭和二十一年六月十九日、ハバロフスク第二十一収容所へ入れられ編成替えがあった。日本人の团结が恐ろしいらしい。少し食物も良くなつた。一週間に一度のシャワーがあるが、僅か五分程度で被服はソ連人の古着。靴は半張皮の代わりに板を打ち付けたもので、ロボットが歩く様になり走る事は出来ない。煉瓦工場や製粉工場と相変わらず追い回される。

十一月頃と記憶しているが十三集容所が全焼した。ドイツの捕虜と日本の捕虜との混成で何十人かの焼死者が出た。我々の分隊からも墓掘りに行つたが、凍つていて掘れない。ソ連人がバーナーの様なもので鉄棒を真っ赤に焼き、土中に打ち込み、その中にダイナマイトを入れ、爆破して死者を一ヶ所へ裸のまま埋めた。



昭和二十三年八月十三日。急いで支度をし貨車に乗る。何日かで海岸の駅へ着いた。付近で作業をしている同胞にオーライ此処は何処かと聞くと、ナホトカと言う。少しづつ日本へ近付いて来た思いでした。二万人余の日本人が此処に居るとの事。第五十三集容所第六分所へ入れられた。

明日は石割り作業だと言われた。作業場へ行つてみると、二年前にチタ地区の炭坑から此処へ移送された日本人は徳島県出身でした。特に注意する事は、此処ナホトカに居るソ連人の将校は殆どが樺太から来て居るので、日本語が良く分かるから、反ソ感情を表へ出さぬ様にと教えてくれた。折角此処まで来ながら反ソ的な行動で再び奥地へ送り返された事例も聞かせてくれた。

翌日は日曜日で午前中は洗濯、午後隣の宿舎を尋ねた。月曜日からは製材工場の夜勤です、ある晩の十時



うつとうしい梅雨が近づき、青梅が八百屋さんの店あります。それは、あまりにも貧しく、そして切ない思い出です。戦争体験と云うには、すこしばかり違うかも知れませんが、私にとっては忘れる事の出来ない思い出です。

七歳の時に生母を亡くした私は、九歳になった時父が再婚をした為、新しい母を迎える事になりました。その当時私は、東京の渋谷区幡ヶ谷本町に住んでいましたが、その義母の故郷である山形県東置賜郡和田村（現在の高畠町）に縁故疎開をしたのです。始めに私が一人が、義母の親族に預けられ、空襲が激しくなってから、父と義母と妹の三人が、後から疎開して来ました。着のみ着のまゝの状態で移住をした私達家族の生活は、現在の飽食の時代には、想像もつかない悲惨なものでした。いわゆるタケノコ生活で得たわずかばかりの食糧で、その日その日をすごしました。一升炊きのお釜で一合の米をこぎ、一升程の水を入れて炊きます。お米が少しふくれてやわらかくなったら、そのお米をすくいあげて、お弁当箱に入れ学校に持つて行くのです。残りのおも湯が家族の朝御飯です。アルミのお弁当箱に入った御飯といつても、お粥ですが、当然の事ながらすみっこに片寄り、恥ずかしさのあまりフタでかくしながら食べました。おかげは沢庵漬が一切と梅干が一ヶ、それもしばらくすると、持つて行く事が出来なくなりました。山形と云えば美味しいお米がどれの所として、昔から有名ですが、その米どころの子供達のお弁当と云えれば、ピッカピカの銀シャリです。その中の何人かがすももの青い実を塩漬にしたものと、お弁当と一緒に持つて来ます。さしずめ今風に云えればデザートですね。お昼休みにそれを皆で分けあって食べるのです。お弁当を持って行く事の出来なくなった私には、ひもじさを埋めるのには本当に、待ち切れなかった事を今でもはっきりと覚えています。

小学校六年生の時に戦争が終り、義務教育の制度が変わり、中学三年の修学旅行の直前に、父の故郷である京都へ転居しました。貧しい私達には、修学旅行へ行く余裕などある訳がなく、今にして思えば、卒業を控えて旅行の直前に転校をしたのは、父と義母との配慮からであろうと考えられます。昭和二十四年に父が亡くなり、その後、義母は山形で生まれた、私達姉妹にとって腹違いの妹だけを連れて、山形へ帰つて行きました。「必ず迎えに来るからね」と言い残して去つて行った義母とは、今だに逢つていません。もしもまだ存命ならば、八十歳になつて居られるはずです。数年前に、四十年ぶりと云う小学校の同窓会に、京都か

うつとうしい梅雨が近づき、青梅が八百屋さんの店

頭に顔を見せる頃になると、いつも思い出される事が

## すももの実が なる頃

堺市 海老名 美子

の休憩に看守が来て、映画を見せてやるから来いと言ふのでついて行くと、その映画は東京裁判の映画でした。看守の話では東条英機の裁判だとと言うが、はっきりした顔形が分からなかつたが、東条英機もドイツのヒットラーの様な人間だった事は確かだと思った。昭和二十四年八月三十日、午後八時より翌日午前四時まで、製材工場での夜勤が終わり、宿舎に帰り横になるが、南京虫で寝つかれない。午前六時頃、日本語ベテランのソ連人の将校が来て、昨晩夜勤をした二十名は午前十時に日本へ帰る準備をして宿舎で待つて居る様に連絡あり。私達は今まで何回となくだまされて來たので、あまり信じなかつた。十時前に二台のトラックが来た。今から名前を呼ぶから呼ばれた者は一步前へ出よと言う。今度こそは本当に祖国日本へ帰れるのかと思えば高鳴る胸の鼓動を押さえ、我が名前を待つ。三十二番目に出た。

三収容所二千名の中から七十名だけ。着のみ着のままでトラックに乗りナホトカの港へ。波止場では石割りしている同胞たちがいる。オーライ元気で頑張れよーと声を掛ける。興安丸と船腹に大書してある。紛れも

なく日本船だナホトカ港は不凍港です。船から桟橋が降ろされ、ソ連将校が、アジン（一）ドワ（二）ツィリ（三）ティ・チエリ（四）ピアチ（五）と乗船人員を数えている。船内では看護婦たちが、ワン、ツー、スリ、と拍手で患者を運んでいた。四年ぶりで日本食にありついた。夢に迄見た白い飯と味噌汁。船員に到着港を聞くと舞鶴だと言う。やつと日本へ帰れるかと初めて実感が湧いた。長い暗い捕虜生活からやっと解放されたので、皆明るくあちこちで笑い声が聞こえる。船内では今までの苦労を忘れたかの様に演芸会もあちこちで。然し一面暗い事もあった。捕虜生活中に苦しめられた者は、相手を探し出し甲板へ。七人行方不明。我々抑留者に政府やソ連人はどんな補償してくれたか。軍人恩給を支給していると言うが、国内外で戦火も浴びず唯軍歴十二年以上あれば支給の対照になる。これが今呼ばれている差別だと思う。（前編を終わる。）

ら山形まで行き参加しました。

文字通り浦島太郎の気分でした。また昨年は、同窓生一同が還暦という事もあり、祈願祭を兼ねた同窓会に、又々、参加してきました。その時、同窓生の一人（今は親友です）がいろいろと思い出話をするうちに、私にたずねました。

「よしこちや オレさきになつてた事だけど、あんたいつも雇になると本を持って教室を出て行つてたけど、どうさ行つてたの？」

私はその理由を友人達の前で、はつきりと話しました。友人達は「そうやつたんか 知らんかったなア」。

勉強の出来るよしこちやは、雇休みも惜しゅうて勉強しどるのかと思うとった。そんな事に気がつかんワシリも、子供やつたんやなア」。その言葉にまた、その頃のつらい思いが、胸の奥のほうから、込みあげてきました。

でも、アルミの弁当箱に片よつたお粥をフタでかくしながら食べた恥ずかしさは、今は全く無くなつきました。

## 防空壕で母の出産を手伝つて

柏原市 川端 和子

私は六十二歳になります。結婚して三十九年目、一人の息子と二人の娘に恵まれ、孫も三人おります。主人も真面目で健康ですし、私も元気で幸せな日々を過

ごしております。  
はるかな昔となつた、終戦の頃の、辛く苦しかった思い出を綴つてみたいと思います。

家族は五人で私が十二歳、父三十七歳、母三十三歳、妹八歳、弟三歳でした。思い出といつても、私もまだ子どもですから、忘れていること・記憶違いのことなどあると思いますが、最も鮮明な部分を綴つてみたいと思います。

私が生まれ育ったのは、大阪市港区市岡浜通り五丁目でした。

昭和二十年三月、港区は大空襲を受け、あたり一面焼け野原になつてしましました。私たちの家ももちろん焼けました。父はその半年位前に出征していて、女子供で留守を守っていました。焼け出された私たちは、父の故郷である宇和島市袋町に住む叔母を頼り、同居させてもらうことになりました。

日本中の大都市が次々に空襲で大きな被害を受けているのが、どこからともなく聞こえできました。戦局の厳しさが、子どもにも伝わってきます。それに、ここ宇和島には予科練の基地がありますので、いつ空襲があるかわかりませんでした。

防火演習といって、長い二本の竿の間に大きな四斗樽をくくり着け、その樽めがけて、バケツの水をザーと投げ入れるのです。それに竹槍の練習。竹の先を槍のように尖らせて、兵隊が上陸してたら、これで突き刺せ、戦えという練習です。でも食べ物を十分に食べてないので力もでませんでした。そんな練習をしたのも関わらず、現実に空襲を受け、焼夷弾がどんどん落ちてきたときには、防空頭巾を被つて防空壕に逃げ込むのが精一杯でした。何の意味もないことでした。夜は電灯に黒い布を被せて、一升ビンに玄米を入れて、棒でコツコツと白くなるまで突きました。長い時

間をかけて根気よく。そして出来た糠をメリケン粉に少し混ぜて蒸しパンを作り、妹たちと分けあって食べました。又、畑のさつまいもの茎を剥つて、筋を取つて、茹でたり、煮たり、えんどうの皮の筋を取つて炒めたりして食べました。叔母から貰つた古着でモンペを作つたりもしました。朝早くから夜寝るまで、生きるために精一杯働きました。母が身重でしたし、幼い妹・弟がいましたから、長女の私が頑張らなくては、と必死に働きました。

やはり宇和島も空襲を受け、叔母の家も全焼していました。私たちは一度も空襲で焼け出されたのであります。でも皆、何とか命だけは助かり、もっと山手にある大超寺奥という村に、父の生家がありましたので、そこへ移りました。雇は山から町へ下りて、焼け跡の焼け米を拾つてきて、炊いて食べました。夜、おなかがすいたと泣く妹や弟に、悪い事でしたが畑のまだ青いトマトを盗んできて食べさせたりしました。

そんな八月の暑い晩、空襲警報が鳴つたので、私は弟を背負つて妹を山の麓の防空壕へ連れて行き、近所の人々に頼んで帰宅すると、母が産氣づき苦しんでいました。山の上り下りが影響したのでしょうか、予定日から二十日も早ましたのです。慌てましたが、誰も頼る人もないので、「しっかりせんと！」と自分を励ました。灯を暗くし、母の口に手拭いを噛ませて、母の両手をしっかりと握りしめました。生まれようとしている子どもの命と、生みだそうとしている母の命をまるため、汗びっしょりになつて頑張りました。そして何分間か経つて、オギャアと産声をあげた時、汗でびしおびしおになつた母の顔を拭きながら、嬉し泣き



に泣きました。

多くの人々が亡くなつたであろう空襲の最中、必死でこの世に生まれてきた小さな命一弟をしつかり抱きしめてやりました。そのときの胸いっぱいの感動を、今もはっきり記憶しています。辛く、苦しいことばかりの日々でしたから。

やっと空襲が解除になって、助産婦さんが来て下さり、へその緒の始末や初湯をつかわせてくださったそうです。というのは、背負ったままだった弟を寝床に寝させたまま、私も眠つてしまつたらしいのです。ほつと安心したのでしよう。

しかし、その弟は、その年の暮れ、肺炎で亡くなつ

てしました。母のお乳が出なかつたし、結局栄養失調だったのでしょうか。夢い本当に夢い弟の命でした。今年五十回忌になるのですね。

今も元気でいてくれる母が、あの当時、私が食べたい・遊びたい盛りの少女だったのに母や妹・弟の面倒をよくみてくれて助かった・嬉しかったと、今でも喜んでくれています。父のいない家を守らなければならぬとい、長女の責任を負つて、私も必死だったのです。もう四九年がたちました。何不自由ない世の中で、思うがままの生活のできる方たちには信じられないことかも知れませんが、戦争のために味わつた苦しみを、少しでも知つていただきたいと思います。

## 恐ろしい空襲の記憶

堺市 伊東 ミツエ

私は富山県下新川郡生地（現黒部市）で生まれ育ちました。終戦の年は二十歳で、不二越という軍需工場で、飛行機の部品のベアリングを作っていました。戦況が激しくなるにつれ、働き手の青・壯年の男性がおらず人手不足だったので、学生でもなく家にいる女子は、徴用されて工場で働くことになるのです。当時私は高等科を出て、お裁縫を習つていましたから。

仕事は単調でしたが、生産、生産で二交代でも追いつかない位で、やがて三交代になりました。全員寮生

活で、一部屋十人。戦時中といつても若い娘です。仲の良い者どうし、賑やかにおしゃべりに花を咲かせたりもしていました。一週間毎に休みがあつて、前日の夜の汽車で帰つて、翌日の夜戻つてくるのです。あわただしいそんな一泊が大きな楽しみでした。

工場には、十四～五歳の挺身隊と呼んでいた朝鮮の少年・少女がたくさん働いていました。朝鮮半島は日本本の植民地でしたから、彼らは日本の教育を受けていて、日本語は達者なものでした。中には女中さんを連

れてきている子があつたりしました。労働力の不足から、こんな小さな子どもたちを半島から連れてきたのでしょう。かわいそうな話です。一班二十名で、日本人四十五人のもどで一緒に働いていました。ところが八月の初めごろ、突然「さよなら 国に帰ります。お姉さんお世話をになりました」と、全員汽船で帰国したのです。

その後すぐでした。あの恐ろしい空襲があつたのは、見ほれるばかりの月夜でした。空襲警報がなって、防空頭巾を被つたり、肩からバックをかけたりしながら、「いつものことだ。どうせすぐ解除になるわ」と横着なことを考えて、ゆっくりゆっくり準備をしていました。でも薄い夏布団だけは抱えて寮を出、五一六人がグループになって、ゆっくり歩いていました。

と、突然、寮の舍監さんのけたたましい声！「あんたたち、なにをぼやぼやしているの！早く川に入りなさい！」驚いて川に入ると、たいてして大きくもない川に人がいっぱいです。人の体積で水かさが増え、首までありました。大勢の人がいるのに、妙にいいんと静まりかえっていました。やがてB29が富山市内を激しく爆撃しました。日本の飛行機が何機か交戦したようでしたが、B29は我が物顔に爆弾を落としていました。焼夷弾がキラキラきらめきながら落ちていくのが見えます。そのB29がいつこちらに向かつて爆撃していくかも知れないという恐怖で文字通り歯の根がありませんでした。あちこちで火の手が上がるのが見えました。あの下で家が燃え、ビルが燃え、そして人が払つてよきとあの川にいた全員、声にならない、

そんな思いで、ギラギラした目を市内に向けていたのでしょう。B29が飛び去つていったのは朝方で、私は全く安全になるまで川に漬かっていたのでした。そして、死ぬのなら、親と一緒にと思いつめ、トランクに荷物を詰めて、五～六人で駅まで歩いていきました。しかしがをした人たちがいっぱい並んでいて、いつ乗れるかわからないのです。結局二～三駅歩いて、ようやく乗ることができました。しかし乗つても身動きひとつとれないので。大きなトランクを抱えていひい泣いていた赤ちゃんの声が、いつしか聞こえなくなつて…。

普段なら五分しかかかるないところを、一時間もかかってやつと三日市の駅にたどり着きました。家では、筆筒などの大きな荷物を知人に預けたり、布団をもつて山の上に上がつたりしていましたが、全員がもなく無事でした。しかしあの富山の空襲でどれ位のたくさんの人が亡くなつたり、傷ついたことであります。今年はの方たちの五十回忌。心からご冥福をお祈りいたします。

（聞き書き）

## 戦争は苦しみ、悲しみだけ

八尾市 橋本 慶子



八尾市 橋本 慶子

帯芯で作った(今でいう)ショルダーバッグを肩にかけ、防空頭巾を背にして工場へ、学校へいっていました。

三月十四日夜の事は二~三日後に終業式を控えていたので、よく覚えていました。よく寝込んでいたところへ空襲警報が鳴り響きました。その日に限って、警戒警報が鳴った記憶がないのです。父と姉(十八歳以上の子女)は避難せずに防火にあたることになっていたので、祖母と二人、「直ぐ帰つてこれるわ」という軽い気持ちで、水筒をかけ、おにぎり包みを手に持つて、避難場所になっていた近くの信用金庫の地下壕に逃げ込みました。警防団の人がドアを閉めたと同時に、B29の低く飛ぶ音、「火が出た!」という声。出でみると、辺り一面が火の海!「中にいると蒸し焼きになる!」

そう叫んだ警防団の人々に続いて飛び出しました。その人の六年生の子どもを先頭に、その人が幼児を抱いて走り、奥さん、私と電車道を走りました。周囲で爆弾の破裂音が激しく、私は危険を感じて横に開いていた冠木門に入り込んだのですが、一足遅れた警防団の奥さんと直撃弾を受け即死しました。

どこを見ても油脂爆弾が鬼火のように燃え、どこへも行き場がなくなり、信用金庫に引っ返しました。そのうち、通用門の扉が燃えだし、やがてビルが燃えだ

し、風がごうごう巻き起こり、火のついた柳行李がごろごろ転がっていました。

私は祖母の手を引いて逃げなくてはならないのに、身ひとつで逃げてしまつて…祖母が無事だったから良かったものの、なんという無責任な孫でしょう。

翌朝最終避難場所の小学校で、家族四人ともかく元気で、煤で真っ黒な顔を合わせました。その後、家に残っていた父と姉は、屋根や庭で火を消していたものの、火の手が迫り危険になり、「逃げよう!」とばらばらに逃げたそうです。父は火におわれて安治川へ出て、小舟に身を隠していたということです。

落ち着いてみると、おにぎりの包みを亡くなつた奥さんの側に落としてきたのに気づきました。カンパン

を食べたりしていましたが、誰かが、軍隊向けの倉庫を見つけだし、牛肉の固まりが蒸し焼きになつたのをみんなで分けて食べました。思いもかけぬ御馳走を頂いたものです。

家も焼けていました。床下に入れておいた物も全て焼けていました。でも家族四人が無事だったことを感謝していました。でも家族四人が無事だったことを感

## 戦争のゆえに失つた時は 永遠に帰らない

八尾市 黒田 武義

私は今年六十四歳になります。骨の髄まで軍国教育に染め上げられ、『お国のために死ぬことだけが人生

の全て』と信じ、又目標として少・青年期を過ごしました。

謝しなければなりません。防空壕の中に、真っ黒に焼け焦げた足が見えたり、死んだ赤ちゃんをおぶって、ぼうぜんとしている若いお母さんも見ました。二日後、被災証明をもらい、父と私は香川へ。姉は、こういう事態でも勤労奉仕にいかなくてはならないので、祖母と武田尾の叔母の家へ身を寄せることになりました。香川の母たちは大阪の空襲を聞き、心配していました。

そして八月十五日、母屋から「戦争が終わつた!」と聞きました。「あんな怖い目にあわなくてもいいんだ」ということが、むしようにうれしかつたですね。「アメリカ兵が上陸してくるから、山へ逃げろ!」って叫ぶのです。それが食料欲しさのデマだったと知つたとき、情けなかつたですね。

八月が巡りくるたびに、「戦争体験集」を読むたびに、日頃忘れている、あの戦争を思い出します。もう絶対あつてはならない戦争。苦しみ、悲しみ以外の何ものも生み出さない戦争。平和が永遠に続くことを、心から祈念します。

(聞き書き)

八尾で生まれ、今も八尾で住んでいた私は、昭和十一年中河内郡柏原町堅下にあった柏原精機工業学校に入学しました。翌年学校が南河内郡藤井寺町に移り国粹工業と名前が変わり、翌年菊水工業と三たび名前が変わったのです。校長兼理事長の西岡実氏が精機工業㈱の社長であり、在郷軍人（中尉）でもあったのです。つまり軍需工場が経営する私学だったのです。

手元に一枚の辞令があります。

【右者本校学徒隊第二中隊 第一小隊班長を命ず。】

昭和二十年六月二十七日 学徒隊長 西岡 実】

学徒隊に編成されるのは入学時からで、約三ヶ月の単位で、あちこちに作業にいきました。

津守にあった大野バルブ工業㈱という海軍の軍需産業で、バルブのやすりかけの作業をしました。工場長には随分泣かされました。小さなミスがあつたり、敬礼が少し遅れると「上官を侮辱した!」と、「きさまらたるんやる! 連帶責任だ」と班ごと整列させ、「さおつけ! 足を開け! 齒を食いしばれ! 頭を前に出せ!」と言って、木刀やヤスリの柄でおもいきり殴りつけるのです。頭はこぶだらけです。寒い寒い冬の時期だったように思います。

東和歌山紀三井寺の名草村で、裏山の陣地の穴掘りもしました。寺の本堂に泊まり込み、村の国防婦人会が焚き出しをしてくれました。

そんなある夜、和歌山市に空襲があつて、山からよく見えました。何本ものサーチライトの筋が交差するなか、B29が焼夷弾をバラバラと落としていくのに、日本軍の高射砲は届かなくて、はがゆい思いをしました。そのうち火の手が上がり、私たちは消火活動のた

め山を駆け降りました。むしろ一枚ずつ丸めて担いでいくのです。防水用水に漬けたむしろを火に被せ、足で踏んで消すだけです。なんぼの役にたつたものやら…でも私たちは必死でしましたよ。駅前でうろうろしていたおばあさんの手を引っ張ると、ズルッと皮膚が剥けて…酷い火傷をしていたのです。ガタガタ震えました。

二十年三月、大阪の大空襲の三日後、淀川べりへ死体処理にきました。家の床下の防空壕に、まるで焼き芋を転がしたように、何体もの死体があつたり、四畳半位の地下濠に、二十人位の人が壁にもたれて蒸し焼きになっていたり。でも目を背けてばかりはおれないで、ふたり一組になつて竹にむしろの四隅を結わえて肩に担ぎ、死体を一本づつ入れて運び、小学校の校庭に並べました。

終戦直前、大正飛行場で掩蔽を作りに行つたこともあります。飛行機を隠すためにすだれの大きいものを作るのです。竹を縦に割いて編み、木の枝や草で覆つていくのです。こんなものを作つて何の役にたつのかと、日本は大丈夫だろうかと、友人たちと話していました。

実はその年の四月、私は海軍特攻隊に志願していました。長男は志願できなかつたのですが、親の許可があればよかつたので親の名を無断に書き、実印を押し、指を切つて「天皇陛下のために死ります」と血書を認めました。父親ははじめは勝手なことをしたと怒りましたが、私の決心の堅いことを知つて、黙つて許してくられました。五月に受験、合格し、土浦海軍航空隊への入隊待ちになったのです。学校として志願を奨励しました。

ていましたし、その時の合格者は十五名でした。死ぬことは怖くありませんでした。『信長は五十年・自分の人生は二十五年』と心底考えていました。

そして八月十五日。校庭に全員集合し、朝礼台に置かれたラジオを聞きました。泣きました。ひょっとしたら、とは思つていましたが、「大勝利を伝えるニュース」を信じたかったんです。

二十年二月、ついこの先の田園にB29が五百kg爆弾を落としたことがあって、祖母の家が吹っ飛び、祖母・叔母・四歳の少女が即死、ここだけで十四名死亡しました。そのうち火の手が上がり、私たちは消火活動のた

した。二十五年前に不発弾がみつかつたことがあります。現在も何発か埋まつたままになつてゐるんではないかと、想像しています。戦後はまだおわつてないんです。

私も爆発せずに埋まつてしまつた不発弾のような人生を歩んできたように思ひます。私のそれまでの精神を支えていた心棒を急にはずされたような、魂の抜けたような虚脱感が今も続いているような気がするのです。

（聞き書き）

## 地獄の亡者の声のように…

堺市 箱田 久枝

私は昭和十七年十月二十七日に結婚しました。その当時は戦争も余り激しくもなく、怖い思いもありませんでした。

しかし、娘が生まれた十八年九月には、空襲がいつあるかわからない状況になつてしまつた。早朝、扇町の産院に慌ただしく入院しました。

二十年になると戦況はますます激しくなつてきて、三月には大きな空襲があり、ミナミから船場にかけて、焼夷弾による火災で丸焼けになつてしまつました。当時私たち家族は北区堂山町に住んでいましたので、その燃える様子、まるで夕焼けのように真っ赤に燃える

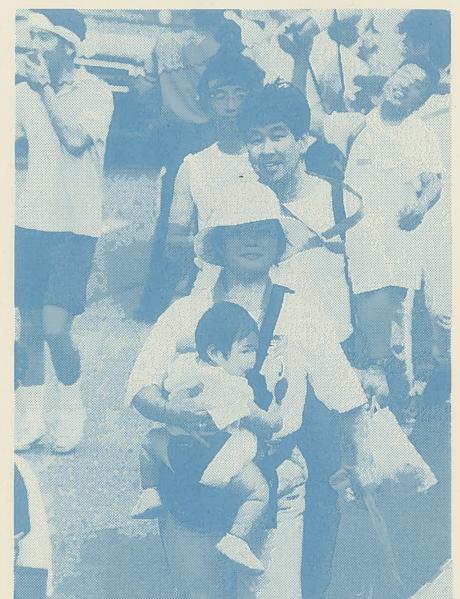


様を、ブルブル震えながら見ていきました。

八月六日（だったと思います）朝、B29の編隊がキタに焼夷弾を雨のように落としました。防空壕の中でもいいとしているが、「こんなところにいてたら危ない！」はよ出なアカン！」とせき立てたので、慌てて飛び出すと、周りは火の海です。黒い煙と赤い炎に取り囲まれているのです。私は娘をおんぶして、主人と必死に梅田の広場に向かって逃げました。焼夷弾がバラバラと雨霰のようにならちてきて、家の屋根や道路に突き刺さると同時にパッと燃え上がるのです。主人の足元だけを見て逃げる私の耳元に、悲鳴や泣き声が、地獄の亡者の声のように聞こえます。私の背の娘も、余りの恐怖のため、泣きもせずおとなしくしていました。あれが『この世の地獄のような』光景と言ふのでしよう。思い出してもゾーイッします。その日、妹の主人が私共の家に立ち寄っていました。妹と子ども達を洲本の実家に疎開させて、その荷物を運ぶために来ていたのです。火の手に追われて阪急百貨店へ避難し、その夜のうちに、南海沿線の粉浜の家にたどり着き私たち家族はきっと死んでしまったのだろうと思つたそうです。

焼け出された私たちは、箕面や堺の草部の親戚を転々とお世話になりました。そして堺空襲にあったそうです。主人は米の買いだしや荷物の受取で出向いていた草部からの帰途、羽衣のあたりで空襲にあったそうです。堺の中心部がゴウゴウと燃えているのを見て、私と娘は焼かれて死んだと覚悟したということです。しかし、万が一ということもあり、避難所に指定されていた小学校に出向き、無事な私たちを発見してくれ

リュックでさつまいもやじゃがいもを買いだしにいつたこと、等々。戦後、私たちの年代の者は戦時中のことが忘れられず、ぜいたくなことを慎んで生きてきました。現在の何でも豊富にある時代が夢のようです。私の末の妹は、一番おしゃれしたい娘時代に、布地といえは人絹やスフしか手に入らず、着たい服も着れな



翌朝、再び草部でお世話になることに

して、そのたどる道々、焼け死んだ人たちをたくさん見ました。男女の区別もつかぬほど、無残に焼け爛れた人たちも…。「この世に神も仏もあるもんか！」と主人が吐き捨てるようになります。親子三人無事だったことを感謝しながらも、家もなにもかも失ってしまったことや、目の前に広がっている地獄のような光景を見て、そう言わざにおれなかつたのでしょう。

淡路島洲本の私の実家の母たちが、堺方面が真っ赤に燃えているのを見て、私たちが「どうか無事でありますように」と祈つててくれたそうです。

娘も五十歳。空襲の恐ろしさや物のない不自由さを身にしみていやというほど体験した私たちの年代の者も少なくなつてきました。トウモロコシの代用食ばかり食べていていたこと、預けていて難を逃れた私の着物や羽織、娘の配給の服まで食料にかえたこと、田舎へいかわいそうだったと思ひます。

今の若い人たちは、体格も良く、のびのびしていて、個性的なおしゃれを楽しんでいて本当に幸せですね。どうかいつまでも、この平和が続きますように、心から祈ります。

## 私の戦争への思い

堺市 高石 長子

戦後生れの私にとって、戦争体験はない訳ですが、本や、資料館見学等で、戦争について学んできたように思います。平和な世の中を築く為に、不幸な時代を知る事は、大切だと思うのです。

以前（約六年前）東南アジアの戦跡を巡る旅に参加し、重い気分で帰国した事があります。日本国内において、被害者としてしか、戦争を知らなかった事、加害者として、日本は何をしたのかの一端を見て、大きなショックを受けたのです。ドイツと日本の戦後処理が余りに違っている事も、学ばねばならないと思うのです。

**東マレーシアにて** 戰争中、日本兵に台湾から連れていかれ、強制労働についた。その後一度も祖国に帰っていない、と日本語で証言された人。マレーシアの青年が、祖父の話として、日本軍がやってくると噂があ

り、原地の人々の感覚では、人力で舟をこいで日本からだと八日程かと思ってると、すぐにやつてきた。そして罪もない人々を並べて、日本兵が、日本刀を左右に振りおろすと、首がどんどんていった。マレーシアでは、女性は体力的にヤシの木に登るのは無理とされているのに、日本兵は面白がって女性を刀でつつきながらヤシの木に登らせた。最後には刀の先が口の中からとび出た。など話してくれました。

**シンガポールでは** 戰争の傷跡は観光に向かないからと、壊されていっていると、聞きました。シンガポールへ観光に来る日本人は多いが、戦跡や慰靈碑を見る人はなく、日本人墓地も忘れ去られたままであるとの事。その墓地へ行ってみると、軍人の墓は大きくて、からゆきさんの墓は小さく朽ちていました。戦争中、日本はシンガポールを昭南島と呼んで植民地化してい

